

# 図書館だより

National Defense Academy Library Bulletin

2012. 9. 26

主な内容	頁
初学者に薦める三つの学問論(寄稿)・・・学 校 長 国分 良成・・・	(437)
『7つの習慣』－自らの人生を生き抜くために－(寄稿)	
前 訓 練 部 長 山下 万喜・・・	(439)
教官著書の紹介・・・・・・・・・・・・・・ 電気電子工学科 森下 久・・・	(442)
教官共著の紹介・・・・・・・・・・・・・・ 総合安全保障研究科教務主事 宮坂 直史・・・	(444)
防衛大学校神奈川県父兄会からの図書寄贈について・・・・・・・・・・・・・・・・	(446)

## 初学者に薦める三つの学問論

学校長  
国 分 良 成

このたび、『図書館だより』の編集委員会から防大生に読ませたい本に関する一文の寄稿を依頼され、はたと考え込んでしまった。防大生にふさわしい国防や安全保障に関するものが良いのか(実際、最初は国際政治の最良の教科書であるジョセフ・ナイの『国際紛争』(有斐閣)などを考えた)、人生や青春に想いを馳せるような小説や物語が良いのか、はたまたプラトンやルソーのような重厚な古典的名著が良いのか、と。いろいろ思いをめぐらしてはみたが、結果は三冊にたどりついた。福澤諭吉『学問のすすめ』(岩波文庫、現代語訳として齋藤孝訳のちくま新書版などあ

り)、マックス・ウェーバー『職業としての学問』(尾高邦雄訳、岩波文庫)、E・H・カー『歴史とは何か』(清水幾太郎訳、岩波新書)がそれである。いずれも私が大学教師 30 年の経験の中で、初学者に学問や歴史の面白さに気づいてもらうのに最適と考え、ゼミの学生に最初の段階で多く読ませた本である。

福澤諭吉(1835 - 1901)の『学問のすすめ』(1880)については多言を要しない。言うまでもなく、これは明治以来日本人に最も多く読まれてきた稀代の文人による啓蒙書の一つである。本書については、本年 3 月 9 日刊行の『図書館だより』の中で、田中敏明前防大

幹事も「人生行路のナビゲーター」としてすでに一文を寄せられている。田中前幹事が推薦されているので外そうかとも迷ったが、むしろ一致したことをうれしく光栄に思い、やはり取り上げることにした。



福澤は「一身独立して一国独立する」(岩波 30 頁)、つまり国民の独立の気概なしに国家の独立もない、一身の独立は学問があるかないかであり、その場合の学問とは難しいことをこねくり回すことではなく、一般の生活に役立つ実学であると論ずる。本書に通底する思想は、官尊民卑の風潮が広がる時代状況に対する福澤の抵抗であった。福澤の『学問のすすめ』という、冒頭部分の「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと云へり」(同 11 頁)の一文があまりに有名だが、福澤の主張の力点はここにはない。むしろ力点はそれに続く部分にある。にもかかわらずなぜに人間世界には賢い人も愚かな人も、豊かな人も貧しい人もいるのか、それは「学ぶと学ばざるとに由て出来るものなり」(同 11 頁)と喝破した部分である。

マックス・ウェーバー (Max Weber, 1864 - 1920. 「ヴェーバー」とも表記される)『職業としての学問』は、福澤とは異なる学問論である。ウェーバーは近代社会科学の基礎理

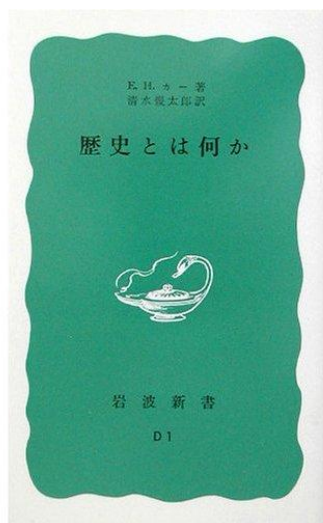


論体系を構築したドイツの碩学であるが、晩年は政治家としても活躍した。彼の著作はあまりに膨大で博覧強記、しかも難解なため、日本語への翻訳も限定的である。ウェーバーの根幹にあるのは西欧近代文明論であり、近代主義の本質としての合理精神の重要性を強調する。私も大学院生の時代から何度となく『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』『支配の社会学』『支配の諸類型』などに挑戦し、悪戦苦闘したのを覚えている。

ここに紹介する『職業としての学問』(1919)は『職業としての政治』の姉妹編であり、一連の講演録の一部である。本書の中でウェーバーは学問を志す者にその心構えを熱く語っている。ウェーバーによれば、近代社会では学問の分化と専門化が進むが、学問を志す者は声高な政治的主張などの雑音に惑わされることなく、「ひとり自己の専門に閉じこもること」(岩波 21 頁)が必要であり、「学問は『それ自身のために』なされる」(同 31 頁)。学問は進歩するものだが、学者は「時代遅れとなることをみずから欲するのである」(同 30 頁)とまでウェーバーは言う。

ウェーバーのいう学問は政策と距離を置いたものであり、実学ではない。彼のいう学問とは価値観を徹底的に排除したもので(没価

値)、学者は学問に専念すべきだと説き続ける。これは現在から見るとまさに「象牙の塔」だが、それには時代背景があった。当時ドイツはマルクス主義やニーチェ哲学が流行し、左右の政治思潮が入り乱れ青年たちに大きな影響を与えていた。ウェーバーの学問論はこうした極端な風潮に対する意思表示であった。彼は大学の教師が預言者や煽動家であってはならず、学生からの批判を許さない教場で政治的言辞を訴える行為を厳しく批判した。



E・H・カー（Edward Hallet Carr, 1892-1982）は、ケンブリッジ大学卒業後イギリス外務省に入り 40 代半ばまで外交官として過ごした後、大学に籍を移して研究者の道歩んだ。その後彼は政府関係や新聞社に身を置いたこともあるが、第 2 次大戦後は大学で学問生活に戻った。驚くべきことに、彼は外務省勤務時代の 1930 年代にドストエフスキー、マルクスなどの伝記も執筆している（いずれも邦訳あり）。国際関係論の分野で、学生への推薦図書として最も使われる本の一つに『危機の 20 年』（1939 年、1946 年改訂）がある。本書は 1919 年ワシントン体制成立以後の国際関係を道義や理想からだけでなく、リアリズム（現実主義）の観点から理解する

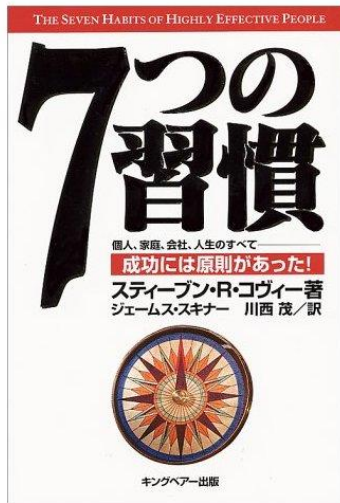
ことの意義を説いている。第 2 次大戦後、彼の研究は主にロシア史に向けられ、その成果である全 14 巻に及ぶ『ソ連史』はややソ連に好意的にすぎるとの批判もあるが、彼のライフワークである、『歴史とは何か』（*What is History?*）は、1961 年にカーがケンブリッジ大学で行った連続講演を 1 冊の本にまとめたものである。講演は全体で 6 つのセクションに分かれているが、いずれも全体のテーマに見事に集約され、各セクションは有機的につながっている。「歴史とは歴史家と事実との間の相互作用の不断の過程であり、現在と過去との間の尽きること知らぬ対話なのであります」（岩波 40 頁）。言わずと知れた有名な一文である。歴史家が過去の無限の事実の中から一定の解釈をもって選択するとそれが歴史的事実となる。個別の歴史的事実を一般化することで、将来への教訓を見出すことができる、その意味で歴史は科学である。歴史に善悪の道徳判断は不要だが、社会科学で主観と客観を分離するのは困難であり、歴史の解釈には価値判断が混入している。つまり、歴史は歴史家を作るのである。ちなみに、私は高校時代に『歴史とは何か』に挑戦したが、ほとんど理解できなかった苦い経験がある。

ここで取り上げた三つの学問論は、我々に多くの基本的な問題を再確認させてくれる。学問は役に立たねば意味はないのか、学問に完全な客観性はあるのか、また主観は排除できるのか、科学とは何か、社会科学・人文科学は「科学」か、我々は今いかなる歴史的段階にあるのか、等々。名著とは、我々に多くの知識を植え付けることでも、我々の感情を揺さぶり昂揚させることでもなく、我々に思考することの面白さを伝えてくれる書物のことである。

## 『7つの習慣』 (スティーブン・R・コヴィー著：キングベアー出版) —自らの人生を生き抜くために—

前訓練部長

山下 万喜



私がこの本に出会ったのは10年ほど前のこと、海上自衛隊が教育の一環として実施していた巡回講習で用いていたのがこの本でした。当時の私は、ちょうど海上幕僚監部において勤務している頃であり、連日の忙しさに追われ、毎日生きることが不思議なくらいの生活を送っていました。そのような中で、豊かな人生の意味や自分の人生を有意義に生きるかなど考える余裕もなく、本に書かれている内容は理解するものの、これを実践することなど考えも及ばず、結局のところ本は机の奥に眠ることとなりました。それから、10年あまり経った今日、防衛大学校の訓練部長として勤務する機会を得て、この学校の教育訓練において特に重視すべきリーダーシップを教えるにあたり、1人の指導教官がこの本を用いて学生を指導している姿を見る機会がありました。その後、改めて読み返したこの本の内容は、新鮮かつ衝撃的な内容でした。

スティーブン・R・コヴィー著の『7つの習慣』は、分類としてはビジネス書にあたるものではありません。ただし、その内容はビジネスの分野に留まらず、この本が唱える原則を通じ、人として生きていく上で必要な「新しい考え方のレベル」を学び取ることができます。訓練部長として、約10年ぶりにこの本を読み直し、そこに書かれた内容に以前とは全く異なる衝撃を覚えました。この本が主張する「人格主義」は、自分の人生で思い悩む人、会社の経営に携わる人、教育者として他人の人生に何らかの影響を与える人、あるいは政治に携わる人などなど、ここに書かれた内容を実践することで、幅広いジャンルの人に「生きる知恵」を与えるものだと思います。

最近、自分ではどうにもならない事で腹を立てたり、やる気を無くしたりしてはいませんか。新聞やテレビで報道される政治不信、いつまで経っても立ち直れない経済、いじめや暴力など教育の崩壊など例を挙げればきりがありません。これに加え、身の回りの日常的なことにまで触れると、それだけでも頭が一杯になる人もいることでしょう。この本は、家庭内、夫婦関係、彼女との関係など身近なことを例に取り、読み手がその中にある原則に自然と気付くよう配慮されています。したがって、書かれた内容はかなり現実的なものであり、本の中に自分の姿を見つけ出すこともできます。特に、親としての子供たちとの会話や夫婦間の会話など、読みながら難

しい顔をしたり、恥ずかしい思いをしたりしている自分に気付き、思わず苦笑してしまうこともあります。自分ではどうしようもないことを、如何に嘆き苦しんでも何の進歩もないことなど、改めて説明する必要はないでしょう。もちろん考えることを止めてしまうというものの一つの手段かも知れませんが、それはあまりにも短絡過ぎる方法だし、いずれは同じことでまた嘆き苦しむ事でしょう。それならば、どのようにしてこの状態から脱出することができるか、そのために何をなすべきか・・・自分を取り巻く環境が変わらないのであれば、自分の考え方を変えるしかないのです。そのように考えると、実はこの世の中でどうにもならない事などなく、自分が変わらないがために、思い悩んでいただけであることに気付くでしょう。

この本の巻頭にある著者からの挨拶の最後に、ガンジーの提唱として「世界に変化を望むのであれば、自らがその変化になれ」と言うことが記されています。自分が変わるといふ衝撃的な提言を如何に受け止めるかは人それぞれでしょうが、この課題にチャレンジするだけの勇気を与えてくれる本であることに間違いはありません。この本で紹介している「7つの習慣」は、個人や人間関係の問題に対する安易な応急処置としての、所謂HOW-TOものなるテクニックではありません。「7つの習慣」は基礎的な原理・原則です。この本によれば、「7つの習慣」を首尾一貫して応用することにより、これが生活の習慣となり、引いては個人、人間関係、組織において大きな転換をもたらすこととなります。実際、読み進めると「なるほど!」と思わず唸るところが随所に現れます。例えば、第一の習慣である「主体性を発揮する」部分には、「影響の輪」と「関心の輪」の違いを説明し

たところがあります。自分が時間やエネルギーの大部分を、二つの何れの輪に集中させているかを考えることにより、主体性の度合いをよく知ることができると説いています。主体的な人は、努力と時間を「影響の輪」に集中させ、自らが影響できる事柄に働きかける。そこに使うエネルギーは積極的なものであり、その結果として「影響の輪」も広げることになります。一方、「関心の輪」に集中すれば、自分ではどうにもならないことから、人のせいにする態度や被害者意識を高め、消極的なエネルギーを発散させるだけでなく、影響を及ぼせる事柄も疎かにし、自ら「影響の輪」を小さくします。どうにもならない事に腹を立て、出来もしない妄想に周囲を惑わせることを止め、影響を及ぼすことのできることにエネルギーを集中できれば、その結果「影響の輪」を広げることにもなります。最後に参考として、ある団体の座右の銘が記載されています。「主よ、変えるべき変えられることを変える勇気を、変えられないことを受け入れる平和を、そしてその区別をつける知恵を与えたまえ」・・・自分の持つパラダイムが音をなして変化した瞬間でした。

自らの人生を生き抜くことについて、訓練部長として学生に対し、「人生は一人の人間が生きた証しでありその人の歴史、人の歴史は努力の積み重ねであり人生は努力の結晶、なにゆえ生きた証しが必要なのかと思ひ悩むよりも、生きた証しを残すことができることに感謝すべき」と教えています。そのために、「防大における4年間の学生期間も貴重な人生の一部、やらされているのではなく自らを活かす絶好のチャンス、自らの可能性を見つけ出し磨きを掛ける努力を惜しまず、誰かの所為にするのではなく自分の人生を自分で歩め」と発想の転換によるパラダイムシフトを

求めています。この本の基本も、パラダイムの変換により自分の中心に原則を置くことで自立を促し、最終的には自分の存在を相互依存へと導くことを説いています。この学校で学ぶことは沢山ありますが、先ず自分を磨く必要があり、日常の訓練や勉学を通じて直接学び取る知識以上に、そのような経験を通じ人としての器を作り上げることが重要だと考えます。

世の中に自己啓発的な本は沢山ありますが、「なるほど！なるほど！」と思いながら、痒いところを直接手で搔いてもらえるような感覚で読むことができ、この部類の本としては傑出したものではないかと思えます。この本

の最後に、自分の人生の中心に正しい原則をおき、ほかの中心のもたらずパラダイムを破り、ふさわしくない習慣の引力を断ち切ることで、自分自身と、家族と、友人と、仕事の同僚が一つになり、世の中の流れを変えることができるかと説いています。人間的な成長に年齢は関係ないとは、若輩者が言うことではないかと思いますが、この本を読むことで、改めてまだ自分にも伸び代があるのではと、どことなく気持ちを豊かにすることができました。世の中のどうにもならない事に腹を立て辟易するより、この本を読んで自分を磨くことに挑戦してみても如何でしょうか。自らの人生を生き抜くことについて、きっと違った世界が見えてくると思えます。

## ~~~~~教官著書の紹介~~~~~

### 『小形アンテナの基礎』



本書は、平成23年5月18日に初版第1刷が発行されました。アンテナの小形化という問題は、Marconiが1901年に大西洋横断の無線通信に成功して以来、研究・検討が続け

電気電子工学科 教授

森下 久 (コロナ社 2011)

られている古くて新しい課題です。本書では、小形アンテナの基本事項、解析法、応用例などの小形アンテナを学ぶ初心者に対してわかりやすく解説しています。最近、スマートフォンに代表される移動通信は様々な分野でのサービスが考えられ、情報通信分野はまさにワイヤレス時代と言っても過言ではありません。ワイヤレスは電波を媒体としており、電波の送受信にはアンテナが必須となります。従いましてワイヤレス時代のアンテナに要求される条件としては常に小形・軽量でありませんが、用途と使用周波数に大きく影響を受け

るため、アンテナは絶えず進化した構造となっています。このように進化するアンテナに関して国内外の研究活動は活況を呈している状況です。そこで私の研究（小形アンテナと電波）に関わりがある無線通信からみた横須賀について述べてみたいと思います。

### 無線通信の始まり

無線通信を語るときは、必ずその基本となる電波について説明する必要があります。その際、講義などで学生に必ず聞くことは、「電波」と「電磁波」の違いです。本質的な問題ではないのですが、意外に知られていないようです。国内的には電波法、国際的には電波通信連合 (ITU) において、電波とは、3THz 以下の電磁波であると定められています。従って、赤外線、放射線、光などは電波とは言わない訳です。その電波の存在を予言したのが、難解(?)な方程式で有名な Maxwell(英国人)であり 1864 年になります。余談になりますが、この方程式が、現在、一般大学工学部の電気電子工学科離れの原因の一つになっているのではないかという意見があります。大袈裟のように聞こえるかもしれませんが、東大をはじめどの大学もその傾向が顕著であり、エレクトロニクスが日本の高度成長の一端を牽引してきた実績だけでは今の若者の心をつかむのは難しいのかもしれません。話を戻して電波の存在を実証したのが、1888 年ドイツ人の Hertz であり、Maxwell の予言から 24 年後の 1888 年です。この時の実証実験は部屋の中で行われており、近接した導体棒間において火花放電によるもので定量的に電波の存在を実証しました。電波を通信に応用したのがイタリア人の Marconi です。1896 年に 3km 間の無線通信実験に成功した際、イタリアで特許申請を行ないましたが認められず、イギリスに渡ってようやく特許が認められ

Marconi 会社を設立しました。その後、1899 年と 1901 年にそれぞれ英仏海峡横断 (321km) と大西洋横断 (3000km) 無線通信に成功しました。この大西洋横断無線通信における送信側はイギリスコーンウェルに設けられた高さ 45m、幅 60m の竪琴型アンテナを用い、受信側はカナダニューファンドランド島において凧で高さ 120m まで上げられた線状アンテナを使用しました。これから無線通信は飛躍的な進歩を遂げましたが、無線通信には電波が必要であり、その電波を放射(送信)及び受信するには必ずアンテナが必要となってきます。現在は、携帯電話に代表されるように究極的な無線通信の時代に近づいています。使用周波数に関係なくアンテナの小形化が課題となっています。従って小形アンテナに関する研究・検討は、大西洋横断無線通信実験から続けられている古くて新しい課題を有していると言えます。

### 横須賀は無線通信の・・・

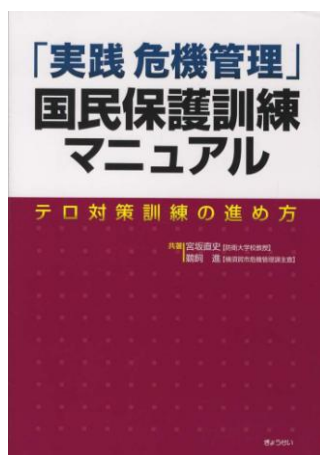
横須賀はご存知のように米海軍基地、海上自衛隊基地や陸海空自衛隊の部隊等が同一場所にある全国でも珍しい街です。話が本題からそれますが、2007 年 7 月に国際学会で米国サンノゼに出張した際、現在記念艦として保存され、以前には横須賀を母港とした空母ミッドウェイを見学する機会がありました。その展示の中で米空母の母港が米国本国以外にあるのは日本だけであることを知り、日米関係について個人的に再認識した記憶があります。一方、その横須賀には、携帯電話に代表される移動通信のメッカ的存在である YRP (横須賀リサーチパークの略称) が NTT ドコモを中心にして活動しています。場所は高速道路佐原インターの近くで NTT 横須賀研究開発センター (旧日本電信電話公社横須賀電気通信研究所) に隣接する場所にありま

す。実は、歴史を振り返ってみると横須賀は無線通信発祥の地として考えてもおかしくはありません。日露戦争時の日本海海戦（1905年5月27日）において連合艦隊の旗艦であった「三笠」が記念艦として保存され、そこには三六式無線電信機のレプリカが展示されています。最近、テレビでドラマ化されて若者にも人気が出ている、司馬遼太郎著の「坂の上の雲」の中の一節には、「・・・世界でもっとも性能のいい船舶用無線機とされる三六式無線電信機が積まれており、・・・」とあり、東郷平八郎司令長官もその無線機が日本海海戦大勝利の一要因と述懐しています。三六式は、明治36年を表しており、西暦では1903年です。なんとマルコーニが大西洋横断無線通信実験を行ったのは1901年ですが、その年には三四式無線電信機が開発され、主要6艦に搭載されています。当時、文献などの情報もない時代に、マルコーニ社から高額で一台しか買えなかった無線電信機を分解して、

より性能の良い電信機を製作した日本産官学の連携・集約した技術力だけではなく、開発に携わった人達の意欲的な(Ambitious)精神力(Spirit)と熱い(Hot)情熱(Passion)に驚嘆する次第です。あえて英語を記載して頭文字を太字にしたのには理由があります。この部分の文章は、電子情報通信学会和文論文誌(2010年9月号)の「システム考学」コラムの中で、「私の四位一体論」から記載したものであり、携帯電話のような移動通信システムにおいては、アンテナ(Antenna)、伝播(Propagation)、システム(System)及び人体の影響(Human Effect)の4項目を連携的に考慮してシステム設計するという四位一体論が私の考えであり、これらの頭文字から先ほどの英語の頭文字にこじつけたものだからです。最後にシステム設計には、四位一体論を考慮することは勿論であるが、いつの時代でも、それに携わる人たちの「気概」が常に大事なのかもしれません。

## ~~~~~教官共著の紹介~~~~~

### 『「実践危機管理」国民保護訓練マニュアルーテロ対策訓練の進め方』



総合安全保障研究科教務主事  
(兼) 国際関係学科教授

宮坂直史 (ぎょうせい、2012年)

皆さんはこの横須賀で、大規模なテロが起きたら、どれだけ被害が出て、関係機関がどのように対処するのか想像したことがありますか。私はテロリズムを研究してい



るので、そんなことばかり考えています。研究室（社会科学館）から東京湾が一望できるので、よく双眼鏡で覗いています。怪しい動きをしているプレジャーボートを見つけたら、もしかしたらあの船、外航貨物船から化学兵器や生物兵器を受け取るのではないかと。

横須賀市では、毎年、国民保護訓練を実施しています。国民保護とは、弾道ミサイルが着弾したり、外国から破壊工作員が侵入してきたり、大規模テロが起きた場合に、国と、被災した自治体や県が一体となって、住民を保護し、災害に対処する仕組みです。2004年に「国民保護法」という法律が有事法制の1つとして出来ました。有事法制は長年タブー視されていたのですから、正しい時代に入ったわけです。

横須賀市の訓練には、毎回、地元の警察、消防、自衛隊、海上保安庁、県庁などが参加し、米軍が要員を派遣してくれたこともあります。防大生約100名が実動訓練の避難役で参加してくれた年もありました。

市長が「ブラインド型」の図上訓練をこなしたこともありました。「ブラインド型」とは、事態がどのように進行していくのか、シナリオを事前に知らせない訓練のことで、首長がそこに身を投じることは全国的にみても珍しいのです。失敗したら恥をかかせてしまうという意識が周囲にあるからだと思います。だから偉い人は視察するだけ、訓示するだけという、本末転倒な風景が訓練現場ではよくみられます。国民保護事態に相当する大惨事が起きれば、現地の対策本部で陣頭指揮をとるのはトップなのですから、彼こそが積極的に参加しなければなりません。

訓練シナリオの内容も横須賀は凄いです。例えば平成23年度の訓練は、小型核兵器

が市内に持ち込まれ、6時間後に起爆するという信憑性の高い脅しをかけられ、その短時間で市の昼間人口38万人すべてを市外に避難させるという図上訓練でした。結果として、電車、バスのみならず、自衛隊やフェリーなどに協力をお願いしても20万人までしか避難できなかったのですが、この時の準備や訓練本番を通じて、自家用車を使われるとどれだけ渋滞になるか、施設や病院の要介護者をどのように避難させるか、さまざまな問題が浮き彫りになったわけで、今後の施策に実り多いものでした。

（え、防大生はどうなるかって？泳いで千葉県に避難するしかないでしょう。）訓練想定をリアルなものにするために、シナリオ背景にも凝りますし、訓練終了後には、なぜこのようなシナリオを作ったのか参加者への説明が監修者から毎回あります。

そのような訓練の積み重ね、反省を踏まえて、横須賀市危機管理課の職員と2人で本書を書きました。その職員は今年で危機管理行政8年目になり、対外的にもよく知られている方です。私たちは、国民保護訓練はワンパターン化してはならないし、それぞれの地域の情勢に則して、独自の企画でやるのがよいと思っています。都道府県レベルの訓練では、国（内閣官房）が準備段階から関与するからか、自然と似通っています。しかし、国は市の訓練には直接関与しません。そこで市は独自に訓練を企画するのですが、これがなかなか難しく、神奈川県内でも訓練を実施していない自治体のほうが多いくらいです。だから訓練マニュアルがあれば役立つのではないかという思いが執筆の動機です。

本書は2部構成で、まず第I部では、なぜ国民保護訓練が必要なのか、現在の訓練は例えばテロや武力攻撃の実態に照らして

正しい訓練なのだろうか、という問いを立てて説明しています。

第Ⅱ部は、本書のメインとなる訓練マニュアルとして、図上訓練や実動訓練など4つの方式について、はじめて実施する人にもわかるように準備段階から詳しく説明しました。訓練の写真や、サンプルの書類もたくさん載せました。

さらに、訓練終了後にすべきこと、平素から危機管理のためにすべきことも書きました。例えば、関係機関の間で「顔の見える関係」を構築するために、危機管理勉強会の開催を具体的に提案しています。

付録として、危機管理の年表（内外の重要な出来事、日本の対策の進展）や国民保護の用語集も掲載しました。本書は全部で190ページです。

危機管理というと、法令、マニュアル、そして非常用の器機や装備などの購入に関心が向いてしまう傾向がありますが、平素からの訓練の中身も等しく重要だと思います。原子力防災訓練や原子力総合防災訓練が（福島県でも）何度も実施されていながら、3.11の避難では何ら役に立ちませんでした。3.11が想像を絶する事態だったからでしょうか。いえいえ、驚くべきことはそれまでの訓練内容なのです。ヒマだったら調べてみてください。あれでは本番に役に立ちません。

良し悪しは別として役人の仕事のスタンスはどうしても前例踏襲的です。しかしテロや危機事案は前例踏襲してくれません。歴史を振り返れば、大きな事案が発生する前、人々はそれとは全く違う、過去の出来事の枠内で物事を考えていたことがわかります。それで新しい事態が起きて面と食らうのです。だからこそ訓練想定が毎回同じではいけないのです。今まで起きていないことも想像し、事案の多様性を普段から意識しておくことが、本番で応用力を発揮できる基盤だと思うのです。

横須賀ではいつ何が起きても不思議ではありません。1990年にはオウム真理教が改造車からボツリヌス菌をバラ撒きました。さかのぼること1960年代にはソ連が日米間に不信感を引き起こすために放射性物質を散布して米軍のせいにする計画を練っていました。近年は、原子力空母ジョージ・ワシントンの母港となり、全国の過激な人たちを吸い寄せています。過激派が飛翔弾を発射したこともあります。

防大生も横須賀市民の一員として、地元の危機管理にも関心を向けて欲しいと思います。そして任官後、一度は横須賀に戻ってきて（陸海空ともありますから）、一緒に国民保護訓練をやりましょう。他機関と一緒にやる訓練も楽しいですよ。リアルでハードなシナリオ作って待っています。

## 防衛大学校神奈川県父兄会からの図書寄贈について

防衛大学校総合情報図書館では、毎年防衛大学校神奈川県父兄会から図書の寄贈をいただいております。

これは平成16年秋、防衛大学校神奈川

県父兄会（以下「父兄会」という。）の役員改選に伴い、父兄会副会長および役員2名が、防衛大学校学生課にあいさつに見えられ、その際、今後、父兄会として永続的

に防衛大学校に寄付金のようなことをしたいとの申し出があったことから始まりました。その申し出を受け、当時の学生課長、学生課長補佐、学生係長の三者で協議し、その寄付金で図書館に図書を寄贈していただき、『防衛大学校神奈川父兄会からの寄贈図書コーナー』を作って、逐次、配架するのが「学生の勉学にとっても、父兄会にとっても良いことではないか」という話をまとめ、当時の図書館に打診しました。その際、選書については、図書館側に一任するとのこと父兄会側にも伝え、父兄会側も承諾され、図書館側もこの申し出を受け入

れたものです。

そして、平成17年度より目録贈呈という形で、父兄会から図書館への寄贈が始まりました。本年6月18日をもって、通算49冊になり、現在に至っております。

6月18日には、父兄会の方々約30人が来校され、学生のパレード訓練をご覧になった後、総合情報図書館で館長に目録の贈呈を行い、その後、図書館内を見学されて寄贈図書の配架状況を確認されました。

なお、最近4年間の寄贈図書は以下のとおりです。

年度	書名
21	写真集 カミカゼ 陸・海軍特別攻撃隊 上・下巻
	写真集・20世紀の記録 カラー写真で見る太平洋戦争秘録
	図説 近代日本とその植民地 全2巻 (英文・復刻版)
22	日韓国交正常化関係資料 基礎資料編 全5巻
	朝鮮戦争と原爆投下計画 一米極東軍トップ・シークレット資料
	第二次世界大戦期 東ティモール文献目録
23	東亜時論 全3巻
	年表太平洋戦争全史
	日本軍思想・検閲関係資料
	日露戦争諷刺画大全 上下
	日本陸軍戦争終結過程の研究
24	図説百科 極東アジアの近代ー中国・香港・マラヤ・オランダ領インドネシアー全3巻(英文・復刻版)

---

**編集後記**

今号では、学校長及び山下前訓練部長からのご寄稿、森下教官及び宮坂教官の著書・共著紹介についての記事をいただきました。誠にありがとうございました。ご紹介いただいた図書は、それぞれの観点から厳選された良書ですので、本科学生だけではなく、研究科学生や教職員の方々も興味を持たれた図書があれば、これを機会にご一読されてみてはいかがでしょうか。

編集委員 吉野 順也

---

NADAL Bulletin Vol. 27, No.1

防衛大学校図書館だより 2012. 9. 26

---

発行及び発行人

〒239-8686

神奈川県横須賀市走水 1-10-20

防衛大学校総合情報図書館 Tel. 046-841-3810

館長 鎌田 伸一

---

編集委員

木下 哲生 (人間文化学科)

弓削 哲史 (電気電子工学科)

吉野 順也 (戦略教育室)

---

編集庶務

大山 宏和 (総合情報図書館事務室)

---

連絡先

〒239-8686

神奈川県横須賀市走水 1-10-20

防衛大学校 総合情報図書館事務室

「図書館だより」事務局

Tel. 046-841-3810 FAX. 046-843-3818

---